

中川 渚

1. 事業実施の目的

パコパンパ遺跡出土土器の分析

2. 実施場所

ペルー共和国カハマルカ州チョタ郡パコパンパ村

3. 実施期日

平成 28 年 2 月 3 日（水）から 2 月 25 日（木）

4. 成果報告

●事業の概要

ペルー北部山地、カハマルカ州に位置するパコパンパ遺跡は、形成期に祭祀センターとして利用された遺跡であり、工芸品生産や儀礼活動を背景に社会の階層化が生じたことがわかっている。一方で、形成期の次の時期であるカハマルカ期では、祭祀センターとしての機能はすでに失われていたものの、形成期に造られた広場が再利用されていた。この広場からは完形の小型土器が、原位置を留めた状態で大量に出土しており、かつて興隆を極めた祭祀センターへの奉納儀礼が行われていたと考えられる。本研究の目的の 1 つ目は、形成期の祭祀センターとしてのパコパンパが、後の時代の人々にどのように捉えられ、活用されたのかを明らかにすることである。

パコパンパにおける奉納儀礼を担った集団は、ペルー北部山地に広がっていたカハマルカ文化に属すると考えられるが、小型土器を大量に製作し、供える儀礼行為は、当時、ペルー北海岸のモチエ文化でも行われていたことがわかっている。しかし、モチエ文化の場合、パコパンパのように広場における儀礼的奉納ではなく、墓の副葬品としての報告が多く、葬送儀礼の一部であった可能性が高い。すなわち小型土器の物質的な要素と製作行為が、山地と海岸の集団によって共有されていた一方で、儀礼行為の文脈は地域によって異なっていたと推測される。その意味で、カハマルカ文化における小型土器の製作、流通、消費の脈絡をまず明らかにし、これらを総合的にモチエ文化のデータと比較することを 2 つ目の目的として設定した。具体的には、今回の調査ではこれらの小型土器の基本的な分類や広場内の分布分析、時期同定を行った。

小型土器は、スリップがかけられるほかは基本的に装飾などがいないため、分類は器形に基づいて行った。また、これらの大量の小型土器の製作と消費が、1 つの集団によるものか複数集団によるものかを明らかにするために、口径、胴部径、高さ、厚さのデータを取り、さらに成形技法や胎土などを分析した。カハマルカ文化は約 1700 年続いた文化であり、その中で早期、前期、中期、後期、末期の時期区分がされている。しかしながら、土器による相対編年は精製土器で組み立てられており、小型土器のみで参照できる編年体系は存在しない。した

がって、この儀礼の時期同定には、小型土器に共伴する精製土器を抽出して行った。上述の方法を用い、315点の小型土器および数点の精製土器を分析、並行して実測図の作成と写真撮影を行った。

●本事業の実施によって得られた成果

本調査によって得られたデータの分析から、同じ広場内でも場所によって小型土器の大きさが異なることが明らかになった。また同時期の土器との比較により、これらの小型土器が、実際に使われていた土器を模したミニチュア土器であることが判明した。時期同定に関しては、共伴する精製土器を土器編年が確立しているカハマルカ盆地の資料に照らし合わせ、カハマルカ文化前期であるとの見通しを得た。今後、パコパンバ遺跡の文脈でさらに考察を加え、さらにモチェ文化との比較を通して、先述したテーマについて考察を深めていく予定である。

カハマルカ文化に関する研究は進んでいるとはいいがたく、特にカハマルカ盆地以外の地域ではその様相がほとんど明らかになっていない。本研究は、パコパンバにおけるカハマルカ文化の様相を明らかにし、隣接地域との関係性を解明することで、カハマルカ文化の体系的な研究の進展に貢献する。成果はペルーの研究誌に論文発表する予定である。

●本事業について

フィールド調査や遠方での学会参加など、研究を進めるにあたってはお金が必要になることが多く、大学としてそれをバックアップしてもらえるこの事業は、学生にとって非常に助かります。今後も同事業が継続されることを強く望みます。